刑事の財布

1

私は深夜に起こされた。

まず、足音が聞こえた。私のあるじの重い足音である。座敷の畳を踏んでこちらにやってくる。

あるじはこのところとみに体重が増えたので、聞き間違えることはない。以前は時々、あるじには無断で私をのぞきにやってくる、あるじの細君の足音と勘違いしたこともあったのだが。

あるじは上着を取りあげ、袖（そで）を通した。するりという音がして私は少し揺さぶられ、然るべくして、あるじの胸の上に落ち着いた。

いつもの場所である。私よりもあるじの心臓に近いところにいるのは、あるじの警察手帳だけである。私は彼と交信したことはない。彼は私よりもはるかに年長であり、常に忙しいか忙

しいふりをしており、職業柄沈黙が好きなのである。

「どの辺ですか」

あるじの細君の声がした。眠たげである。

あるじは「都内だ」とだけ返事をした。この夫婦はいつもこの会話をする。ある種の儀式であろうか。

「お金、大丈夫ですか」

「とりあえずは、いい。必要ならおろすから」

細君は黙っている。言葉どおり、あるじは私を取り出して中身を確認することもしなかった。

私はあるじの財布である。

「いってらっしゃい」

細君の声に送られて、あるじと私は家を出た。外には師走（しわす）の風が吹いている。あるじのコートを吹き抜ける。私には見ることができないが、してみると、あるじのコートはかなりくたびれているのであろう。

あるじはゆっくりと歩いていく。いつもそうである。気が進まないのかもしれず、あるいは疲れ切っているのかもしれぬ。

あるじは私をふくらますために、犯罪者を捕らえる仕事をしているのだ、という。他人に尋ねられれば、必ずそう返答をする。

よしんばそれがあるじ一流の照れが言わせるものだとしても、私はあるじに同情する。

私はふくらんだためしがない。

私とあるじとは長いつきあいである。正確な年月を数えてみたこともなく、またそれは私には不可能なことであるが、おおよそ七年ほどになるらしい。

それがわかるのは、ついさきごろ、あるじが細君とこんな会話をしていたからである。

「そのお財布、だいぶくたびれてきたわね」

「そうかい」

そのときあるじは、私の中身を確かめてからいつもの場所に納めるつもりだったらしく、私を手に持っていた。細君は近づいてくると、私をあるじの手から取りあげた。

「角（すみ）っこが破けてるわ。白っちゃけてきてるし」

「まだまだ使える」

「これ、いつプレゼントしたものだか覚えてます？　お父さんの四十歳のお誕生日よ」

細君は、あるじを「お父さん」と呼んでいる。

「そうだったか？　父の日だったと思っていた」

細君は声をたてて笑った。

「あの年は、涼子（りょうこ）と相談して、お誕生日と父の日のプレゼントをいっしょにしちゃったんで

すよ。だって、このお財布、高かったんだもの」

涼子とは、あるじの娘の名前である。私はよく覚えている。私が仲間たちと共にならんでいたショーケースを、生真面目にのぞきこんでいたあるじの娘の顔を。

あのときはまだ子供だった。その涼子嬢は、来春大学に進学する。

「大きな買い物をした年だったしな」

あるじはぼそりと言った。細君は、ええ本当に、と答えた。

私を買ってくれたそのすぐあと、あるじの一家は家を買った。住宅ローンもそのときに始まった。

それが今、行き詰まっている。非常に苦しいところまできてしまっている。もともと、この家は、あるじの力では支え切れぬ高い買い物だったのかもしれぬ。

あるじの心臓の近くにはべり、金の出入りを逐一見てきた私には、その事情がよくわかる。だから、このやりとりが、あるじ夫婦にとって重いものであることも承知している。

あるじ夫婦は、ここひと月ほど、その家を手放そうかという相談を頻繁（ひんぱん）にしている。

あるじは、手放すことはないという。細君は売ろうという。

「手遅れにならないうちに」と。その話はいつまでたっても平行線で、たいていはあるじが仕事にでかけていくことでうやむやに終わりとなる。

七年のあいだに、私は少しく擦（す）り切れた。あるじも、あるじの家計も擦り切れていた。

「今年のお誕生日、お財布にするわ。本革の、うんといいやつ。これ、七年も使ってくれれば充分よ」
　細君は私をあるじの手に返した。
「まだ使えるよ」と、あるじは言った。「それとも、古い財布を使っているとみっともないから嫌か」
　細君はなにも言わない。
「家を買ったら財布も買えないほど貧乏になったなんて、笑い話にもならんな」
　しばらくしてから、細君は小さく言った。
「そんな意地悪な言い方をしなくたって」
　細君は、ただ金の心配をしているだけではない。あるじのことを思っている。負担の大きいあるじの仕事を思っている。あるじが健康を損いつつあることを思っている。それでなくても、刑事は身を磨り減らす職業であるのだから。
　それならせめて家を手放して、少しでもあるじを軽くしてやりたいと思っている。
　あるじにもそれはわかっているはずだと、私は思う。
　そして、あるじも怯えていると、私は感じる。自分自身のことを。そんなとき、あるじは私の納まっているあたりをそっとなでさする。つまりは心臓の上を。
　そして溜め息をもらす。

この続きは、書籍でお楽しみください。
◎注意
本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。
個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。